

浮世絵版画「第二回内国勸業博覧會ノ圖」楊洲周延筆

文化学園大学教授(博物館実習担当) 植木 淑子



この浮世絵は明治14年(1881)に開催された第二回内国勸業博覧会を題材とし、会場を訪れた天皇と皇后、女官たちを描いている。作者は楊洲^{ようしゅう}周延^{しゅうえん}、明治14年3月に辻岡屋文助が刊行し、判型は大判3枚続である。

江戸時代に始まった浮世絵は、その時々の人たちが関心をもつ事象が題材とされる。江戸時代には歌舞伎や遊里、名所などが主な題材であったが、明治時代になると大きな変化が見られる。幕藩体制から天皇を中心とする体制へと変わり、西洋の文物が取り入れられたことによって、皇室、国家的な行事、政府要人の肖像画、戦争や動乱、西洋風の建築や風俗などが主流となった。元来、浮世絵は版画という手法によって同一の画面を多数刊行し、描かれた内容を人々に知らせるという役割があるが、明治時代には刻々と変わる社会情勢や大きな事件に応じ、報道という性格がさらに強くなった。「第二回内国勸業博覧會ノ圖」もこのような明

治時代の浮世絵の特色がよく表われている。

内国勸業博覧会は明治政府の殖産興業政策の一環であり、明治10年から36年までに5回が開催された。いずれの回においても各地の物産品、機械類、さらに美術・工芸品などが出品され、産業の発展に寄与した。内国勸業博覧会には必ず天皇と皇后が行幸啓し、天皇は毎回の開会式で産業奨励の勅語を下し、優秀な出品者に与えられる褒章の授与式に出御することもあった。

第二回内国勸業博覧会は、明治14年3月1日から6月30日まで東京の上野公園で開催された。内務省と大蔵省が所管し、敷地面積約43,300坪に本館5棟をはじめ美術館・機械館・農業館など6棟が建設され、出品点数は約85,000点、入場者数は820,000人余りに達した。

画面の中では中央の噴水が一際目を引き、これは第二回内国勸業博覧会の呼び物の一つであった。噴水は会場敷地内の真ん中あたりに位置し、

直径約18mの菊形の泉水の中に作られ、三人のしょうじょう猩々(中国の想像上の動物。人間に似た姿をし、酒を好む。)が背負う酒瓶から水が噴き上がる仕掛けであった。猩々は陶製で90cmほどの高さがあり、陶工として名高い宮川香山が制作した。噴水の後ろに見えるのは美術館の建物である。

この噴水と美術館を背景とし、天皇と皇后、女官たちが配されている。天皇は画面の左側に女官の中に紛れるように描かれているのに対し、皇后は右手前に天皇よりも大きく目立って描かれている。同じ場面に天皇と皇后が描かれているが、これは史実にもとづくものではない。『明治天皇紀 第五』(宮内庁編 吉川弘文館 1971)と『昭憲皇太后実録 上』(明治神宮監修 吉川弘文館 2014)によれば、天皇と皇后と一緒に第二回内国勲業博覧会を訪れることはなかった。この浮世絵は3月12日に刊行の届けが出されていることから、博覧会開始後まもなくの時期に絵師の想像によって描かれたといえることができる。

当時の人々にとって天皇や皇后の姿、皇室の動静は大きな関心事であり、これらを題材とした浮世絵が多数刊行された。絵師たちは実際の場面で天皇や皇后を目することはなく、想定される虚構の場面を描くのが通例であった。事実ということよりも題材が重要とされたのである。

こうしたことから、それぞれの人物の服装も正確に描かれてはいない。天皇は黒地に黄色や赤で華やかに装飾を施した軍服を着用し、羽根飾りのついた帽子をかぶっている。この姿は明治6年に撮影された写真に類似していることから、これに倣って描いたと考えられる。皇后は赤い袴はを穿き、着物のような衣服を羽織っている。これは宮廷独自の服装で、いわゆる十二単の略装にあたるけいこ袷袴である。着物のような衣服うちきを袷と呼び、袷は裾を引くように長く仕立てるが、屋外で着用する場合は腰の部分でたくし上げて着装する。画中の皇后の袷は裾を引いた状態であり、正確な表現とは言い難い。また皇后は髪飾りを付け、扇を開いて持っているが、袷袴姿の場合は髪飾りを付けず、扇を開いて持

つことはない。この皇后の姿も、天皇と同様に明治6年に撮影された写真に類似している。女官たちも赤い袴を穿いているが、袷ではなく着物を羽織り、腰に紐を結んでいる。これは本来の宮廷服ではなく、当時の女官がこのような姿であったかは疑問である。

それぞれの人物の服装の表現は正確ではないが、洋傘(日傘)と靴が描き込まれていることに注目したい。洋傘の1本は皇后に差し掛けられ、もう1本は左側の女官が閉じたまま持っている。靴は小さくて見にくいですが、袴の下から黒い靴のぞが覗いている。いずれも西洋から流入した服飾品であり、伝統的な宮廷服には不釣り合いのようにも感じられるが、当時は宮廷の装いとして採用されていたのである。西洋からの文物は服飾に限らず人々の興味の対象であり、浮世絵の恰好の題材とされた。この浮世絵において、絵師は洋傘を強調して描いているようにも思われる。

これまで見てきたように「第二回内国勲業博覧会ノ圖」は、会場の実景に天皇と皇后の架空の行幸啓が重ね合わされている。絵師の意図は会場の様子を伝え、同時に一般の人々には遠い存在の天皇と皇后の姿を示すことにあった。この浮世絵には虚実が取り混ぜられているとしても現代の私たちは、日本が近代化の道を歩み始めた明治10年代半ばの社会状況の一端を読み取ることができる。この後さらに近代化が進み、19年には皇后の服装は和装から洋装へ変わった。そして30年代になると、写真や印刷技術の発達によって雑誌や絵葉書が隆盛となり、皮肉にも浮世絵そのものが衰退することになるのである。

作者の楊洲周延(天保9～大正元)は、明治時代を代表する浮世絵師の一人である。士族の出身で本名を橋本直義といい、歌川国芳、三代豊国、豊原国周らに師事した。皇室、政府高官、西洋風俗を題材としたものを数多く手掛け、一方では江戸城を題材とした「千代田の大奥」「千代田おんおもての御表」などを描いている。また美人画も得意とし、題材はきわめて広範囲に及んでいる。